

広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 第64号 2015 207-216

明治・大正期の輸出用キモノに見る日本の絹・刺繍・意匠のちから

柴 静 子
(2015年10月5日受理)

The Power of Japanese Silk, Embroidery and Design on Exported Kimonos for Western in the Meiji and Taisho Period

Shizuko Shiba

Abstract: In this study, I set the following problems for the understanding of clothing culture in Japan. (1) To Collect the exported kimonos for western and find a characteristic of the silk fabric, embroidery and design. (2) In the United States, would the kimono bring the Japonisme of the fashion mode? (3) How would the kimono spread in the United States? By analyzing the kimonos exported for western, historical documents of Iida and Company "Takashimaya", newspaper articles, advertisement, mail order catalogues of the department stores and the textbooks of the clothing constitution in America, the following results were derived. In 1904 Japanese kimonos were received with St. Louis Exposition enthusiastically. American women purchased them by the advertisement of the department stores, Japanese kimonos on the show wind, mail order catalogues of departments. At first kimonos were sold as import goods from Japan in the stores specializing in orient articles and the department stores at the large cities. The cheap kimono-like gowns that were not products in Japan became popular in the USA after 1920s. In this way, we were able to find power of Japanese silk, embroidery and the design of exported kimonos in the Meiji and Taisho period.

Key words: homemaking education, culture, silk, embroidery, exported kimono

キーワード：家庭科，文化，絹，刺繍，輸出用キモノ

はじめに

生活環境が大きく変化している今日、急速に失われつつある伝統的な衣生活文化、とりわけ着物の文化について家庭科の学習を通して高校生に理解させ、これを継承・発展させる視点と意欲をもたせることは、ファストファッションに傾いた衣生活への省察を促すとともに、日本人としてのアイデンティティー形成に寄与すると考えられる。そこで筆者は、高等学校段階の家庭科の衣生活学習において「日本の伝統と文化」についてどのように教えるべきか、という問題意識を根底に据えて、ここ数年間、研究を進めてきた。

平成26年10月から11月には、広島県と山口県の高등학교117校の家庭科教師を対象として、日本の伝統と

文化の学習がどのように行われているのか等について、質問紙の郵送による実態調査を行った。調査対象校中、40校（回収率34.2%）の家庭科教師から次のような回答を得た。「家庭科において日本の伝統や文化に関する教育は必要かどうか」という質問については、「とても必要だと思う」および「やや必要だと思う」と答えた教師が各47.5%であり、合計すると95.0%（38人）で、ほぼ全員が肯定的な反応を示した。「これまでに衣食住の文化や様式について授業をしたことはあるか」という質問についても、38人が「ある」と回答し、これも高率（95.0%）を示した。この38人の教師の実践内容を知るために、さらなる質問紙調査を実施した。調査時期は平成26年11月であり、回答者は23人、回収率は60.5%であった。調査の結果、23人中18人（78.3%）

は、「家庭基礎」や「家庭総合」、また被服関連の専門科目の中で衣生活の伝統と文化に関する内容を取り上げていることが明らかになった。それらは、浴衣の着装やたたみ方・帯の結び方の実習、外部講師による着付け講習、刺し子のコースターやランチョンマットの製作、日本の伝統衣装についての解説、風呂敷文化の解説、備後緋や柳井縞についての解説、着物のはぎれを使用した小物製作などであった。このように高等学校家庭科の教育現場において衣生活の伝統と文化に関する内容の導入が図られていることは喜ばしいことであり、さらに萌芽を発展させて、数時間のまとまった題材による学習をデザインして実践し、教育効果を見出すことを期待する。

ところで筆者と附属学校家庭科教員のチームは、平成24年度から広島大学学部・附属学校の共同研究として、明治期・大正期に焦点を当てて実物衣装の観察と意義の解明を組み込んだ被服学習のプログラム開発を行ってきた。各年度に開発したプログラムを附属福山高等学校の『家庭基礎』で実践し、その結果を「広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要」に発表してきた。平成26年度の研究「欧米を魅了した明治のキモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習の開発」は、「明治期の輸出用衣装の実物観察」と「ものづくりの精神の発見」とを中心としたプログラムであったが、とりわけ学習効果が高いことが示された¹⁾。

本研究では、これまでの成果を踏まえたうえで、衣生活の文化と伝統に関する学習のさらなる発展をねらって次の課題を設定し、日本のキモノ、絹・刺繍・意匠のちからをより鮮明にすることを目的とした。(1) 実物教材である輸出用キモノは類型に属するように収集し、日本の絹地・刺繍・意匠の特徴を見出す。(2) 明治・大正期に京都の高島屋は最高級のキモノを欧米に輸出したと推測できるが、この店の貿易活動とキモノはどのような関係にあったのか。(3) キモノはアメリカでどのように受容され、浸透・拡大していったのだろうか。以上の課題について、実物衣装、高島屋の貿易関連史料、日米の新聞記事・広告、デパートのメールオーダー・カタログ、アメリカの被服構成の教科書などの資料を使用して解明することを試みた。

1. 明治・大正期の輸出用キモノの類型と特徴

(1) ヨコハマ・ローブと呼ばれたドレッシング・ガウン

欧米から収集した明治・大正期の輸出キモノについて、関連の資料を交えて、図1～図9に示した。

図1-①はイギリスから収集したもので、ワイン

レッド色の柔らかな羽二重に刺子が施された寝衣(ねまき: dressing gown)である。後ろスカートに付けられた深いプリーツ、マトンレグ・スリーブそして前開きの7つの釈迦結びが特徴的である。このフォルムは、図1-④に示したガウンの図と極めて似ている。同図は、1894年2月17日付の新聞「The Sydney mail」(オーストラリア発行)の記事に添えられていた。タイトルは、「A Japanese Dressing Gown」というもので、「日本のドレッシング・ガウンは、絹と絹の間に厚手の木綿布を入れて3層にして、これらが刺子でとめられており、軽くて保温性があり優れている。ピッツ通りの『HORDERN BROTHERS』店だけで販売されており、2£ 12S 9d である。」という内容である。この図は、イギリスのリバティ店(LIBERTY & Co.)の1898年のクリスマス・カタログに掲載されているドレッシング・ガウンの図とも酷似している。同カタログには、同店が西欧人に適合するようにスタイルを指示して、日本で製作されたガウンであると記されている²⁾。以上から、図1-①のガウンは、1890年代に日本で製作され、リバティ店が本国や植民地(オーストラリア)などで販売していた内の一枚と考えられる。

図1-②・③のドレッシング・ガウンはアメリカから収集した。表地は光沢のある茶色の柔らかな羽二重で、裏地には薄手の平絹が用いられている。全体に幅が約3cm程度の刺子が施されたうえに、左右対称の色鮮やかな草花模様の刺繍が前身頃、後ろ裾、衿、カフス、ポケットに装飾として加えられている。後ろ身頃にはピエモンテーズ風プリーツが付けられており、下に着るボリュームのあるドレスに対応するように工夫がなされている。前開きの7カ所には釈迦結び紐が付けられて、東洋的な雰囲気感を醸し出している。

図1-⑤～⑧のドレッシング・ガウンもアメリカから収集したものである。表地はセージ色の塩瀬羽二重を使用して張り感をもたせている。裏地にはピンクの平絹が使われ、中綿として入れられた厚手の木綿地とキルティング仕様で縫い合わされている。後ろ身頃には三重に折り重ねたピエモンテーズ風プリーツが付けられており、そのため裾幅が相当広くなっている。前身頃、衿、カフス、ポケットには淡い色合いの草花模様の細かな刺繍が施され、前開きの7カ所に付けられた釈迦結び紐と相俟って東洋の面影を感じさせる。

19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米に大量に輸出されたこのようなガウンは、ヨコハマ・ローブと呼ばれ、とりわけ寒冷地に住む女性に歓迎された。それらは、当時を代表するファッショナブルな日本製寝衣として、メトロポリタン美術館、ケント州立大学博物館など、欧米の美術館・博物館に多数所蔵されており、

衣装のジャポニズムの象徴的存在となっている。

メトロポリタン美術館収蔵の日本製ガウンの写真および京都服飾文化研究財団が行っている同種のガウンのパターンや刺子の針目等についての調査結果³⁾と、図1のガウン3種とを比較したところ、これらは明治・大正期に横浜本町で最高級の絹製品を取り扱っていた「椎野正兵衛商店」が製作し、輸出していたドレッシング・ガウンである可能性が高くなった。

(2) 刺子のドレッシング・ジャケットとチョッキ

図2-①は、アメリカから収集した刺子のドレッシング・ジャケットで、小豆色のやや厚めの絹の縮緬地に多種類の蝶が刺繍されている。1890年代に西洋で流行したマトン・スリーブである。図録『モードのジャポニズム 東京展』の71頁に示された「LIBERTY & Co.」の1898年のクリスマス・カタログには、酷似したジャケットが日本製としてイラストで紹介されている。このことから、リパティが日本で製作させたドレッシング・ジャケットがアメリカに渡ったものと考えられる。

図2-②は、薄手のピンクの羽二重を表地とした刺子のジャケットに桜花を刺繍したものである。アメリカから収集した。ニューヨークのブロードウェイで東洋品専門店として有名であった「A. A. Vantine and Company」の1917(大正6)年と1919(大正8)年のメールオーダー・カタログには、これと酷似した刺子のジャケットが写真で掲載されている。この店は、当時、横浜にも出張所をもっており、ハンカチ、陶磁器、籐製品などの日用雑貨から刺繍のキモノ、刺子のジャケットなど、多種類の日本製品を取り扱っていた。

図2-③と④は、ごく薄い絹の表地と裏地の間に真綿を入れて3層にし、刺子を施した白い袖なしチョッキと黒の袖付きチョッキである。アメリカの寒冷地で、コートやドレスの下に着用できる、軽くて温かい防寒着として重宝された。

これらのチョッキについて、横浜の絹貿易商「管川商会」の社主管川清は、1916(大正5)年に次のように述べている。

チョッキは一種独特のものにして日本と西洋服との合の子の如きものなり右は数年前米人エー、ダブルユー、ハフ氏衣裳仕入れの為渡来し偶市中店頭にて日本職人等の用ゆる刺子のチョッキ様のものあるを見。案出されたるものにて主として米国婦人の防寒具に用いられ現今に於ける輸出年額数十万枚の多きに達す。(『時事新報』1916年5月20日)

これを証明するかのように前出の「A. A. Vantine and Company」のメールオーダー・カタログ(1917年、1919年)には、このチョッキと同じものが写真で掲載されている。図2-④の刺子のジャケットの後ろ襟首

には、販売店である「Mandel Brothers CHICAGO」というシカゴの大手デパートのレーベルが付けられている。素材、構成、刺子の形状は③のチョッキと同様で、袖を加えてジャケット仕様にしたものである。

先述のように管川は、1916年の数年前、すなわち1910年頃にこのようなチョッキとジャケットが考案され、その後大量に輸出されるようになった、と述べているが、それが事実と違わないことは、1910年10月20日付「BOSTON EVENING TRANSCRIPT」に掲載された当地のデパート「Filene's」の広告が示している。それには、「横浜の出張所から手刺キルトのドレッシング・ガウンおよびベストとジャケットが3000枚到着した。温かくて軽いベストは1.5ドル、ジャケットは3.0ドルで販売されており、白、空色、灰色、紺色、黒を取り揃えている。」とある。

(3) 豪華・華麗な刺繍のイヴニング・コート

図3-①は水色の絹縮緬地に豪華な孔雀と桜が肉入り刺繍されたイヴニング・コートであり、アメリカから収集した。丸首、キモノ袖、両方の裾にスリットが入っており、前開きは5カ所の釈迦結びになっている。孔雀と桜という円山四条派の日本画を思わせる構図は、呉春の岩上孔雀図に近いものであり、前出の図録『モードのジャポニズム 東京展』の94頁に掲載されている孔雀と桜が見事に刺繍されたキモノ風室内着と類似のモチーフである。このコートのフォルムは、同図録の98頁に掲載されている飯田高島屋製のイヴニング・コートとも類似している。だが、筆者が所有している「S.HISHIMURA」のレーベルが付いた鳳凰の刺繍をもつイヴニング・コートとも全体的な形や刺繍の形状が似ているところから、一概に飯田高島屋製とはいえない。

図3-②・③はアメリカから収集したイヴニング・コートである。黒の絹縮緬地に西洋的な薔薇が曲線的に配置され、花の部分には肉入り刺繍がなされて立体的である。①と同様に、丸首、キモノ袖、両方の裾にスリット、前開きは5カ所の釈迦結びになっている。このコートは、図3-④に示したように、飯田高島屋発行の宣伝誌「新衣裳93号」(1910年)の口絵写真の「夜会コート」に極めて似た形態をもつものである。

以上のように、この2つのイヴニング・コートは、レーベルはないが、1900年代初期の飯田高島屋製である可能性は高い。

(4) 伝統衣装を発展させたキモノ風室内着

図4-①～③は、袖口に組紐の飾りが付き、藤の下で遊ぶ鶏が刺繍された羽二重の豪華なキモノ風室内着であり、アメリカから入手した。円山四条派の日本画において藤や鶏が題材にされることは少なくない。例

えば、廣田孝著『高島屋「貿易部」染織作品の記録写真集』（2009）には、明治・大正期に飯田高島屋が製作した鶏や藤模様の絹製品が相当数掲載されている。しかしこのキモノ風室内着の刺繍と酷似したものは見られない。京都には飯田高島屋に勝るとも劣らない老舗の呉服店「千總」があり、同じく最高級の刺繍キモノを海外に輸出していたことから、同店の製作品である可能性も捨てきれない。また、この室内着の刺繍図案については、飯田高島屋や千總で刺繍製品の下絵を描くことに従事した時期があった幸野模嶺の作品である可能性もあるが、その他の円山四条派の作品かも知れない。筆者が欧米から収集したキモノの中で最も日本画の要素をもったものであり、飯田新七や西村總左衛門ら京都の呉服商が幕末の戦乱で荒れた都の復興と新時代の基盤を築くために、江戸時代から継承してきた画風と刺繍の技をかけて取り組んだ輸出用室内着であったことが伝わってくる。肩の辺りの劣化が激しいところから、長期にわたり紫外線の強い場所にタペストリーとして飾られていたことが窺われる。

図5-①・②はフランスから収集したキモノ風室内着である。クレープ・デシン地に、菊と鳳凰が豪華に刺繍されており、同じ生地に菊の刺繍を施したタッセル付きの柔らかい帯を前もしくは後ろで結んで着用する。図5-③は、前出の飯田高島屋の「新衣裳 第93号」の口絵写真「欧米流行婦人向の日本服 緬地草花の刺繍」である。①・②は、これと似通った雰囲気をもつもので、日本画家の下絵を刺繍師が丁寧にさしていったことが見て取れる。③と比べると着丈が短くなっており、ふき綿部分が見当たらない。この部分を含めて10cm以上、裾が切り取られていると考えられる。キモノ風室内着の特徴であるふき綿入りの裾は床に届く長さであり、それゆえに汚れや痛みが激しい。また裾を引くので動きにくいこともあり、縫い上げをしたり、切り取ったりした室内着が少なからず見られる。

図5-④の上段は、イヴニング・コートの丈を短くして、はっぴの前開きを付けた形状の衣装である。下段の写真は、飯田高島屋が1911（明治44）年に発行した貿易カタログ「Novelties in Japanese Articles」の24頁に掲載されている「ショート・キモノ」と呼ばれた衣装である。両者は類似した形であること、及び上段の右図が示しているように、実物衣装の薔薇の刺繍は高度な技で精緻な肉入繡がなされていることから、④の上段のキモノは飯田高島屋製であると推測できる。

図4と5に示したキモノ風室内着は、「(i) 日本の伝統的着物の形状を基調にしながらも、前身頃と後身頃の間に襠を入れて裾幅を広くする、裾にふき綿を入れるなどの変形を加えて、ドレスの上に着用して美しい

シルエットを出す東洋の衣装である。(ii) 刺繍については、日本画そのものか或いはデザイン画の特徴を入れ込んだ西欧的要素が強い日本画が下絵とされて、自然界の花鳥が大胆でかつ精緻に繡われている。糸は主に撚糸を用いて強度を出し、釜糸の使用は部分的である。(iii) 帯はキモノと同じ生地を用いて柔らかい。両端には刺繍を入れ、先端にはフリンジを付けている。日本の伝統的な体を締め付ける堅くて幅が広い帯ではない。」という特徴をもっている。

(5) 「Vantine」が取り扱ったキモノ風室内着

図6-①・②のキモノ風室内着はアメリカから収集した。これらの襟首には、図6-③に示したレーベルが付けられている。トレード・マークとして交差する2本の三角旗、その横に「Vantine's BROADWAY NEW YORK」という文字が記されている。①は、透感がある白の薄地の羽二重を表地に使用し、裾にふき綿を入れているが、極めて軽量である。桜花の小枝が全体に散らばり、日本画というよりは西欧のデザイン画に近い刺繍模様である。背部の腰の位置でタックを取って、膨らんだスカートをもつ衣装の上に羽織ってもゆったりと包み込むことができるデザインである。②は、紫の薄地の羽二重で作られており、丈も短めで軽量である。小さな桜花の刺繍は袖口と衿だけになされている。1914年版の「Vantine」のカタログに、「この可愛い刺繍のついたキモノは小さくたたんで旅行バッグに入れて運ぶことができるので便利である。」(28頁)と記されているように、旅行用の羽織り物として重宝された。1914、1917、1919年版の「Vantine」のカタログには、①・②以外のキモノ風室内着も数種類掲載されており、特に1914年版には、「日本のキモノは1世紀以上前から女性の体を縛りつける衣装ではなく、コルセットを必要としない。女性に適した衣装である。」(28頁)とコメントが付けられている。

先述のように、1890年代から1920年代にかけて、ニューヨーク5番街に店舗を構えた「A.A.Vantine & Co.」は、アジア、特に日本から輸入した刺繍の絹衣装、工芸品など、東洋の面影を感じる芸術的な日用品を大量に販売するとともに、店舗内に茶室コーナーをもうけてキモノ風室内着を身につけた女子店員が客をもてなすなどして、アメリカにおけるジャポニズムの形成と浸透に貢献した。近年、同店がアメリカのジャポニズムに果たした役割について研究が進みつつある。

(6) 量紙に納められて海を渡った岩井屋のキモノ

図7はアメリカから入手した紺色の羽二重のキモノ風室内着であり、背中に2羽の鳳凰が刺繍されている。刺繍そのものは精緻ではないが、構図は洗練されている。入手した時には、「名古屋市赤門通り岩井屋」と

書かれた和紙の「畳紙」に、まるで本来の着物であるかのように包まれていた。日本から輸出されたキモノ風室内着がどのような姿で海を渡ったのか、この事例を通して推測することができる。

(7) 1920年代からのキモノ風室内着

図8-①・②のキモノ風室内着はアメリカから収集した。①は、下から上へと、紺から黄に移るぼかしの良質の輪子地に、大きく鮮やかな牡丹と菊が刺繍されている。脇に襷が入らない本来の着物の構成を取っており、1920年代のアール・デコ・スタイルのドレスの上に着装することを想定している。②も①と同様の襷のないデザインである。こちらは襟首に「made in Japan」というレーベルが付けられている。手刺繍ではあるが精微さに欠け、また生地は良質ではなく低価格のキモノであることが一目で分かる。1920年代になると、このような大衆化した、それでも手刺繍の日本製キモノがアメリカに出回るとともに、現地のデパートが独自にデザインした、刺繍ではなく染めの安価なキモノ風衣装が市場に大量に出てくるようになる。

(8) ドレッシング・ガウンとイヴニング・コートのリフォーム衣裳

図9-①のワンピース・ドレスはアメリカから入手したリフォーム品である。リフォーム以前は、図1-⑤～⑧と同類型のドレッシング・ガウンであり、19世紀末から20世紀初頭に横浜から輸出された、椎野正兵衛商店製である可能性が高い。地色は紺色で、厚手の塩瀬羽二重に、ベージュやグレーの淡い色調の絹糸を使用して草花や鳥が精緻に刺繍されている。元のガウンでは、前開きの7カ所に釈迦結び紐が付けられており、裏地には薄手の平絹が用いられて、中綿と一緒にキルティングが施されていた。更生時に裏地は除かれて、すっきりとした形のワンピースが作られた。日本製であることを暗示している小鳥と、稲や菊などの草花をモチーフとした美しく精緻な刺繍をそのまま前身頃に生かして、リフォーム品でありながら、華やかさと高級感を出している。

図9-②もアメリカから入手した。リフォーム前は、図3-②と同類型のイヴニング・コートであった。「IIDA & COMPANY "TAKASHIMAYA" YOKOHAMA」というレーベルが更生後もそのまま襟首に付いており、1907（明治40）年に開店した飯田高島屋横浜貿易店からの輸出品であったことが推測できる。生地はクレープ・デシンで、つやのある淡黄色である。同色の絹糸で垂れ下がった藤がたわわに肉入繻されており、豪華である。元のイヴニング・コートの裾部分を切り取って衿を作り、袖口は切らずにそのまま縫い込んで幅を狭くしている。前開きはダブルにし、裾のスリット部

分も縫い込んで身幅を狭くして、さや型のシルエットのコートに更生している。以上から更生時期は、ファッション・モードに変化が起きた1920年代と思われる。

2. アメリカにおけるキモノの受容と浸透・拡大

(1) セントルイス万国博覧会と飯田高島屋

前出の横浜の絹物商、管川は、アメリカにおけるキモノの飛躍的な拡がりについて、1904（明治37）年に開催されたセントルイス万国博覧会が起点となっていることを指摘している。この見解は、同万博開催時と前後1年の新聞・ファッション誌の記事を分析して、アメリカにおけるキモノ普及の起点を同博覧会とした最近の研究⁴⁾とも一致している。また、図10に示したように、セントルイス万博を契機としたキモノ・ブームの一端を当時の写真から知ることができる。この写真⁵⁾は1904年にニューヨークの写真館で撮影された。若い女性が、飛び立とうとする鶴の姿を大きく刺繍したキモノ風室内着を纏い、腰をかがめて団扇をかざしている。後ろでゆったりと結んだ帯は、キモノと同じ生地で作ったフリンジ付きの柔らかい半幅のものである。この衣装は、帯のフリンジや裾のふき綿部分など、図5-③の飯田高島屋のキモノ風室内着との類似点が多く見られることから、同店の製品であると考えられる。セントルイス万国博覧会において飯田高島屋は、秀逸した製品の展示と販売活動を総力で繰り広げ、他の呉服店の追隨を許さなかった。

1876（明治9）年に米国のスミス・ペーカー商会と取引を始めたのが飯田高島屋の最初の貿易であるが、これ以降、絹製品の輸出を中心とした貿易活動を盛んにするとともに、内外の博覧会・展覧会に刺繍を主たる技法とした美術染織品を多数出展し、多くの賞を得た。同店は海外に出張所を設けて輸出の拡大を図るとともに、1911（明治44）年には最初の貿易通販カタログを発行し、顧客の拡大を図った。これには、主力商品として袖に房飾りがついた西洋婦人用刺繍キモノ、イヴニング・コートや、はっぴ型のショート・コート、刺子のドレッシング・ガウンなどが掲載されている。

当時、飯田高島屋は国内では京都に加えて横浜、東京、大阪、神戸、福井に支店を持ち、海外ではフランスのリヨン、イギリスのロンドン、中国の天津、オーストラリアのシドニーに貿易出張所を設けていた。しかし、アメリカには直接的には出張所を設けておらず、横浜にあった通販会社である「PARAGON EMBROIDERY CO.」や「Vantine」をはじめとする専門店やデパートなどを通してキモノ風室内着、



図1 刺子と刺繍が施されたドレッシング・ガウン（ヨコハマ・ローブ）

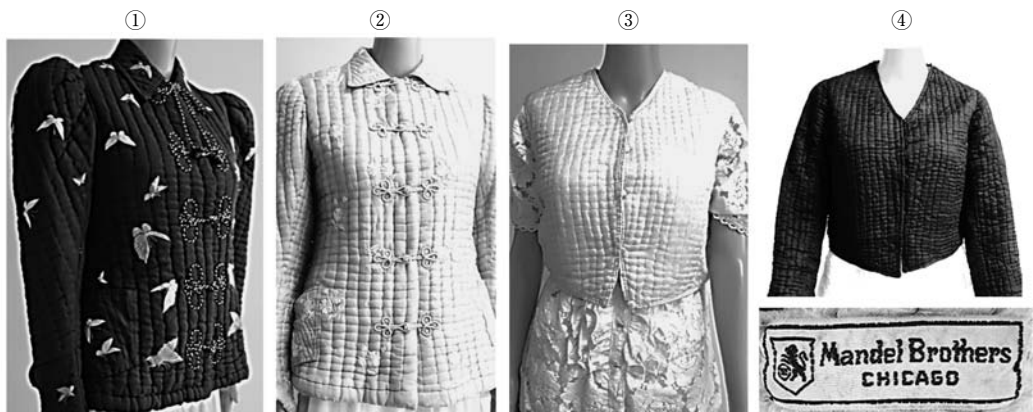


図2 刺子と刺繍が施されたジャケットと刺子のチョッキ（袖なし、袖付き）



図3 孔雀と薔薇模様が刺繍されたイヴニング・ガウン



図4 藤の下に鶏模様が刺繍されたキモノ風室内着



図5 鳳凰と菊刺繍のキモノ風室内着と薔薇刺繍のショート・キモノ



図6 「Vantine」で販売されたキモノ風室内着とレーベルおよび桜の刺繍



図7 岩井屋製キモノ



図8 襟のないキモノ風室内着



図9 ドレッシング・ガウンの更正品



図10 ニューヨークでのキモノ (1904)



図11 McCall のキモノ型紙 (1908)

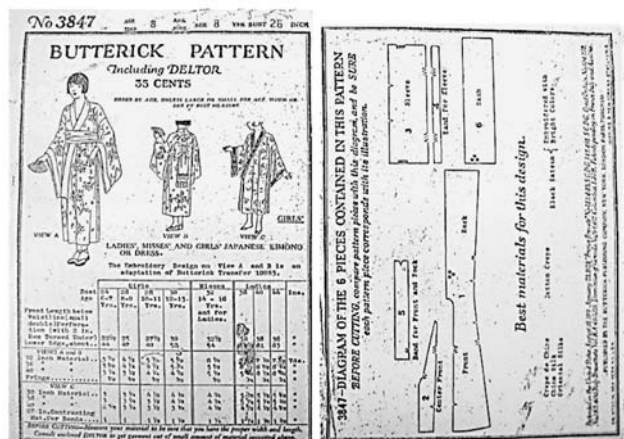


図12 Butterick のキモノ型紙 (1923)

ショート・キモノなどをアメリカ各地で販売していたと考えられる。

アメリカにおけるキモノのジャポニズムを牽引した勢力の一つとして、セントルイス万博における飯田高島屋の出品が上げられる。小倉良編『聖路易万国博覧会日本出品協会報告』（1906）によれば、この時の京都府全体の売り上げは約45,571ドルであったが、飯田高島屋の売り上げはそのうちの約3分の1を占める15,357ドルに至っている⁶⁾。広大な会場に建てられた美術館には、竹内栖鳳が下絵を描いた獅子の巨大な刺繍壁掛けなど数点が出品され、また独自に設けた飯田別館には、西洋婦人用の日本式キモノなど刺繍を施した絹製品が数百点陳列された。この博覧会に深く関与した管川は、「一千九百四年聖路易博覧会に際し或る出品者の如きは最も華美艶麗なる縫又は染色模様のもを出陳したるに果然米人の嗜好に投じ忽ちにして全部第一番に売却済みとなり更に電信を以て追加出品の準備を余儀なくせしめし事あり爾來益々需要を増加し来り今や其輸出年額数百万円を数うるに至れるなり」（1916年5月20日付「時事新報」）と述べている。「或る出品者」とは間違いなく飯田高島屋を指している。なお、この万博の閉幕にあたり、飯田高島屋は『刺しゅう着物』を工業館に寄贈している⁷⁾。

(2) デパート、広告、型紙、裁縫教科書とキモノ

北米ではキモノは当初、都市の東洋品専門店やデパートにおいて、日本からの美しく魅力的な輸入絹製品として販売された。1916(大正5)年当時のデパートの様子は、次の管川の言葉から知ることができる。

斯くて現今に於ける米国婦人間には吾着物熱頗る盛にして（中略）吾が着物の名は全米国を風靡せんとしつつあり左れば紐育に於ける有名なるデパート、メントストアのウォーナーメイカーの新館前面の店舗には日本衣装を飾り付け加うるに（中略）市俄古市の湖に面したる目貫の場所にも日本着物を陳列して人目を惹くものあり其他ボストン、費府聖府等を始め大小の都会至る処に之が陳列を見ざるなし。」（1916年5月20日付「時事新報」）

アメリカの新聞には、少なからずそのようなキモノの販売広告が掲載されている。1882（明治15）年11月10日付の「BOSTON EVENING TRANSCRIPT」には、日本の横浜からキルティングのドレッシング・ガウンとジャケットが届き、「HEWING & HOLLOS」で販売されている、との広告が掲載されている。その後1920年代まで、主にボストン、ピッツバーグ、シカゴ、スポケーンといった寒冷地のデパートが、特にクリスマスプレゼント用品として新聞紙上でキモノを宣伝した。このようにして、キモノの人气が高くなり購入者の層が広がると、刺繍と形に特徴がある日本製キ

モノ（Japanese kimono）ではなく、当地で多様にデザインした、日本的模様がプリントされた安価なキモノ風のガウンが出回るようになった。いわゆるキモノの大衆化が始まった。

キモノ人気を受けて、家庭においてキモノ風の衣装を自作するための型紙も販売されるようになり、次第にキモノは市民の間に浸透していった。多くの市販のキモノ型紙のうち、1908年と1923年に発行された2つの例を図11と12に示した。これらの型紙では、各パーツは、日本の着物のように直線裁ちではなく、緩やかな曲線を使用するなどしており、仕上がりは着物のようだが、裁断は着物のそれではないところに特徴が見られる。

市販のキモノ型紙の普及と並んで、1910～30年代のアメリカの被服テキストの中には、「Kimono 製作」を題材として取り上げているものが多い。キモノはゆったりと着心地のよい衣装であり、製作が極めて簡単であることがその主な理由である。例えば下のようなテキストにおいては、身頃と袖を一体にして裁断し、縫製部分をできるだけ少なくした簡単至極のキモノ風衣服の製作が取り上げられている。このようにして、わが国のように格式と伝統を守ったキモノの製作や着装ではなく、それらにとらわれない大胆な発想のもとでキモノ風の衣装が製作され、自由に着装されることによって、キモノはアメリカにおいて広く普及していった。なお、キモノを裁縫教材として取り上げたテキストは、次のとおりである。

1. Burton, Ida Robinson., Burton Myron Garfield, "School sewing based on home problems", Vocational Supply Co., 1916.
2. Fales, Jane, "Dressmaking: a manual for schools and colleges" C. Scribner's Sons, 1917.
3. Hanna, Agnes K., "Patternmaking", Macmillan, 1922.

3. キモノ輸出の意義とアメリカでの着用様式

これまで、アメリカにおけるキモノの受容と浸透・拡大に関して、実物衣裳と文献等を通して明らかにしてきたが、最後にこの衣装の貿易上の意義と、当地ではどのように着用されたのか、ということについて、管川の証言に沿ってまとめてみる。

管川は、キモノ輸出の貿易上の意義について、次のように述べている。

若し夫れ以上の諸点に注意して製作し輸出せんか将来益々需要を増加すべく同時に原料羽二重、琥珀、縮緬、

繻子等の製産業を促進す可し而して其生産地としては羽二重は石川福井、福島、琥珀は足利、桐生、繻子は羽前、縮緬は京都、桐生、丹後等にして又其刺繍は上等品京都を主とし中等品は石川、横浜小田原等を主とし各地に亘れり而も之等衣裳の輸出は吾貿易品中の華として斯界に聊か気を吐くに足るべし即ち吾輸出品の多くは其仕向先の風俗慣習等に応じて製作し供給するものなるに準り着物に至りては然らず其原料は国産に仰ぎ又其工芸形式意匠図案等総て吾特種の技巧に因り恰も我国粹を海外に紹介するに等しければなり。(1916年5月20日付「時事新報」)

また、キモノがどのように着用されたのかということについては、次のように述べている。

キモノは如何なる場合に着られるかと云うに道を行く時は到底適しない、勿論室内用のものであるが最も歓迎されるのは女優の楽屋着で脱ぐにも着るにも軽便と云うので評判される、次には朝起きて化粧をして洋服を着るまでの間、または休憩室に居る時とかに着るるが、是非無ければならぬのは旅行の汽車中である云う、紐育近いニューボートは我が大磯や熱海と云ったような処で富豪の別荘が軒並みにある、(中略) 此処で各富豪の婦人や令嬢が寄集まってきてキモノ晩餐会を開いたことがある、又テーパーティーを開いたこともある、斯る時に勝を得るキモノは最も新しくて派手な、満堂の視線を一身に集める様なものである、斯んな調子でキモノは盛んに貴婦人間に用いられて居る(中略) 之を着るにはキモノと同じ色同じ質の細い紵紐で袖の両端に房の付いたのを緩りと纏う、仕立ては年々変わっていくので、キモノをモデルにさせて見た上、今まで広がった所を狭くしたり、短い処を長くしたり、新型を作って其寸法を送って来る、前に云った中で、チョッキは羽二重地で中に綿を入れ防寒用とし、ナイトガウンは全々の寝衣であるガウンは普通寝衣と云って居るが、其实客と接せぬ時に用いる室内着である。(1916年6月1日付「時事新報」)

以上のように、キモノの輸出はその原料が国産であるため、様々に工夫して絹地を織り出している各地の絹産業や刺繍業を盛んにすること、並びに意匠や図案などもすべてわが国特有の技能を用いたものであるから、あたかも日本の粹を海外に紹介するに等しい、と誠に当を得た見解を示している。筆者が欧米から収集した明治・大正期のキモノの実物がどのような意味をもっているのということについては、本稿で引用した管川の数々の証言が語ってくれている。

おわりに

本稿では、高等学校の家庭科における衣生活の文化に関する学習のさらなる発展を意図して、3つの課題

を設定し、絹・刺繍・意匠のちからをより鮮明に捉えようとした。その結果、次の点が明らかとなった。

1. 明治・大正期の輸出用キモノは4類型に分けることができた。収集したキモノ風室内着についていえば、絹地は羽二重と縮緬が多く、刺繍は肉入繻を多用している。円山四条派が得意とする桜・菊・雀・鶏等の自然界の動植物をモチーフとして、あたかも日本画が刺繍で描かれているかのようなのである。構成には背縫がない広幅の絹織物を使用し、脇に裾を入れた裾括がりのフォルムを作っている、という特徴が見られる。
2. 管川の証言や文献研究から、日本キモノの輸出の起点はセントルイス万国博覧会(1904)であり、その後の10数年が全盛期であったことが明らかになった。
3. 飯田高島屋は、セントルイス博において西洋婦人用の刺繍キモノ他数百点を展示・販売し、アメリカにおけるキモノの受容と浸透・拡大に大いに貢献した。
4. アメリカでは、日本からの輸入キモノは、デパートの広告、ショーウインドの実物、メール・オーダーのカatalogなどを通して販売された。日本からのキモノは刺繍を施した高級な室内着として熱烈に受け入れられた。しかし、購入者層が広がるにつれて、刺繍のキモノはやがて原型とは形を変えて染め模様のキモノとして浸透し、教育の場でも製作しやすい簡単な衣裳として取り上げられるようになった。

以上のように、明治・大正期の日本の絹・刺繍・意匠のちからを輸出用キモノに見出すことができる。

本研究に当たっては、高島屋史料館の格別のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

【注】

- 1) 高橋美与子、柴静子、日裏美智代、一ノ瀬孝恵、高田宏、木下瑞穂、「欧米を魅了した明治のキモノの探究を通して染織文化を未来につなぐ被服学習の開発」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第43号、pp.289-298、2015。
- 2) 図録『モードのジャポニスム 東京展』、京都服飾文化研究財団、1996、p.71。
- 3) 周防珠美「明治初期の輸出用ドレッシング・ガウンの比較」、『ドレスタディ』第63号、pp.32-36、2013。
- 4) Kim, Laura. "The influence of St. Louis 1904 World's Fair on Japonisme that appeared in periodicals", A Thesis presented to the Faculty of the Graduate School, University of Missouri-Columbia, 2012.
- 5) この写真は、ニューヨークのマンハッタンにあった写真館「Byron Company」で1904年に撮影された。丁度、セントルイス万博開催の頃である。
- 6) 小倉良編『聖路易万国博覧会日本出品協会報告』、聖路易万国博覧会日本出品協会、p.435、1906
- 7) 同上書 p.228。